

釣り仲間

ある日、桜内さんから突然メールを戴きました。「M友会の釣り仲間に加わりませんか」と。幼い頃からの「釣り好きの本性」が、ふと蘇ってきました。

横浜の八聖殿の真下の八王子海岸の近くで育ったせいか、小さい頃は、父親と本牧岬の沖合辺りに、アナゴ、飯蛸、ネズ、カレイなど、よく出かけた思い出があります。小学校、中学校時代は、近隣の漁師の子弟と、小型の伝馬船のような漁船の櫓を操りながら、本牧の沖合でアナゴ、ハゼを釣りました。横浜港やヨットハーバーの防波堤では、夜釣りで、セイゴ、アジ、アイナメ、アナゴなどを狙ったものでした。よく釣れた日は意気揚々と、釣り果ゼロの日はガックリと、今のバス停の数にして 15・20 くらいの距離を真夜中歩いて帰って来たのですから、相当の「釣りキチ」の素質はあったと、思います。

長じては、本牧の海や東京湾が埋め立てで汚れたこと、又自分の時間の制約もあり、稀に川釣りに打ち興じた以外は、すっかりごぶさたでした。アメリカのコロラドに留学していた頃、師事していた先生に誘われてロッキー山中の溪流に鱒釣りに行ったことが、一度ありました。ハエのような擬餌針を 10 数メートル先の水面に、先の柔らかい釣り竿を巧みに操りながらポンとおくと、鱒が飛びつく仕掛けでした。先生が 10 数匹釣るのに、1 匹もつれなかったのが、やがて「慈悲深い鱒」が私の擬餌針にも食らいつき、やっと 1 匹釣りあげて、かろうじて面目をほどこしたこともありました。

M友会での初釣りは、大磯港から仕立て船でのアジ釣りでした。松井さんと大立目さんの指導よろしく、準備万端整えて、4 時半に家を飛び出して行って見たものの、風雨の急速な悪化予想に現地で中止でした。松井さんのよき判断だったと思います。2 度目は、無事出船。本格的な仕立て船での初体験の私でも、おおよその見当はつき、松井、大立目両兄の間に陣取って、夢中で釣りました。両兄が着々と成果をあげるのを、じっと横目で「何がオレと違うかな」と、観察、考察していると、やがて私の竿先にも、あの「ピクピクからグット引く信号」が伝わってきました。最初は、狙ったアジではなくサバでした。でも大きな色艶のよい、それこそ EPA, DHA を沢山含んだ、栄養満点の良形のサバです。アジ釣りの名人は、よく釣れるサバには、目もくれず海に返す人もいましたが、私は大事にクーラーボックスに入れて成果を楽しみました。そのうちに、私の針にも、アジもかかり、5 時間近い奮闘の成果は、アジ 4 匹、サバ 9 匹、松井、大立目両兄の余剰サバも戴いて、サバ合計 15 匹で重いクーラーボックス

を手に持った達成感は、初体験としては「マアマア」でした。

さあ、家に帰ってからの三枚におろすのが、一仕事でした。4匹のアジは、家内が手際よく刺身にしてくれましたが、サバは、私の出番でした。小さい頃から、魚やの店先で魚屋さんが上手に三枚におろすのを見ていましたから、見よう見まねで、結構上手に開きました。よく切れる出刃包丁がないといけません。松井さんに教わったように、三枚におろしたものを、ペーパータオルで軽く水切りをし、サランラップにくるんで、冷凍庫に収納しました。最後の頃は、冷凍庫も満杯になり、腰も痛くなり、船上の釣り以上に疲れました。

その夜は、いつもは一、二度目覚めるのに、朝まで6時間、グッスリでした。釣りの緊張と疲労は、どうやら健康によさそうです。

「さあ M 友会の諸兄よ、竿先にくる、コツコツ、グゲーというあの感触、それはそれは、快感ですよ。男たる者、竿先の快感を求めて釣りに行こう。」

(M友会の釣りキチの初参加の一日、平成 21 年 8 月 8 日)